

日本海きらきら羽越観光圏



めてためてた
花のやまがた
観光圏

口之宮湯殿山神社蔵(本道寺)
西川町指定文化財
〔板絵 出羽三山女講中参詣図〕

とうほく街道会議

第6回交流会 出羽の古道 六十里越街道大会

報告書

東北の街道から夢・未来を語る

もうひとつの神秘日本、いま蘇る
～出羽三山信仰のひろがりと人々の心～

日時

平成22年

10月29日(金) 30日(土)

主会場

弓張平公園パークプラザ

〒990-0733 山形県西村山郡西川町大字志津172-3
TEL.0237-75-2040 FAX.0237-75-2301

- ◆ 主催 とうほく街道会議第6回交流会 出羽の古道 六十里越街道大会実行委員会
とうほく街道会議、アルゴディア研究会、六十里越街道保存推進委員会、松根地区六十里越街道を守る会、月山志津温泉旅館組合、
田麦俣観光協会、あさひむら観光協会、出羽商工会、月山朝日観光協会、西川町商工会、山形県、鶴岡市、西川町、
めてためてた♪花のやまがた観光圏、日本海きらきら羽越観光圏
- ◆ 主管 出羽の古道 六十里越街道会議
- ◆ オブザーバー 東北地方整備局、東北運輸局山形運輸支局
- ◆ 後援 NPO法人全国街道交流会議、あおもりかいどう会議、NPO法人秋田岩手横軸連携交流会、いわて街道交流会、すみた街道倶楽部、
みやぎ街道交流会、くりはら街道会議、三宿地域連携協議会、越後米沢街道・十三峠交流会、ふくしまけん街道交流会、
羽州街道交流会、NPO法人奥州街道会議、山形新聞、河北新報社、朝日新聞山形総局、毎日新聞山形支局、読売新聞、NHK山形放送局、山形
放送、山形テレビ、テレビユー山形、さくらんぼテレビ、東日本高速道路株式会社東北支社山形管理事務所、山形大学農学部、
東北芸術工科大学、社団法人東北建設協会
- ◆ 協力 財団法人東北活性化研究センター

とうほく街道会議 第6回交流会 出羽の古道 六十里越街道大会プログラム

10/29
〈金〉

◆交流会

1◆オープニングセレモニー 13:00～13:25 〈弓張平公園パークプラザ体育館〉

- オープニング 岩根沢三山神社太々神楽
- 実行委員長挨拶 出羽の古道 六十里越街道会議 会長 小関 祐二氏
- 主催者挨拶 とうほく街道会議 会長代行 藤原 優太郎氏
- 来賓挨拶 東北地方整備局 道路部部长 三浦 真紀様
- 来賓紹介
- 歓迎の挨拶 西川町長 小川 一博氏

2◆基調講演 13:30～14:45 〈弓張平公園パークプラザ体育館〉

- 講師 ^{いわはな}岩鼻 ^{みちあき}通明氏 (山形大学農学部教授)
演題『もうひとつの神秘日本、いま蘇る～出羽三山信仰のひろがりと人々の心～』

3◆次回開催地宣言 14:45～14:50 〈弓張平公園パークプラザ体育館〉

- とうほく街道会議 第7回交流会(開催地:秋田県) 東成瀬村教育委員会 教育長 鶴飼 孝氏

4◆第1分科会 パネルディスカッション 15:00～16:30 〈弓張平公園パークプラザ体育館〉

- テーマ『地域における街道文化ネットワークの可能性』
コーディネーター:張 大石氏
パネリスト:那須 恒吉氏、村上 賢一氏、矢口 正武氏、矢野 光夫氏

第2分科会 車座座談会 15:00～16:30 〈弓張平公園パークプラザ2F 展望室〉

- テーマ『わが郷土の誇り 六十里越街道』
世話人:鐘 啓記氏
街道旅人:斎藤 政広氏、小野寺 良寛氏、渡部 千代氏、布施 範行氏

◆街道パネル展 12:00～16:30 〈弓張平公園パークプラザ展示ロビー〉

- 東北風景街道登録団体活動紹介パネル展
- めでためでた♪花のやまがた観光圏「神秘日本 岡本太郎のアングルを歩く」モデルツアー パネル展
- 月山志津400年祭パネル展

◆街道談義 17:30～19:00 〈変若水の湯 つたや〉

- 山形県の郷土料理や地酒による交流会
○歓迎の挨拶 鶴岡市長 榎本 政規氏
○アトラクション 田麦俣神楽 演目「とりさし」

◆街道探訪会

A◆三即身仏・岩根沢コース 9:00～15:00

- 〈9:00〉月山あさひ博物村集合 - 本明寺 - 注連寺 - 大日坊 - 米の粉の滝ドライブイン(昼食) - 本道寺口の宮湯殿山神社 - 岩根沢三山神社 - 〈15:00〉月山あさひ博物村解散
※バスにて移動 案内等協力団体:アルゴティア研究会、六十里越街道ガイド

B◆田麦俣から湯殿山コース 9:00～15:30

- 〈9:00〉田麦俣七ツ滝公園駐車場集合 - 独鉾清水 - 千手ブナ - 細越峠(昼食:「街道弁当」) - 笹小屋跡 - 湯殿山はてる - 〈15:30〉田麦俣七ツ滝公園駐車場解散
※全区間徒歩:約8km 案内等協力団体:山船頭人協会、アルゴティア研究会

C◆四ッ谷山の神から志津コース 9:00～12:00

- 〈9:00〉志津駐車場集合 - 四ッ谷山の神 - 弓張茶屋跡 - 石畳 - 常夜燈石碑群 - 不動院跡 - 〈12:00〉志津駐車場解散(昼食:月山志津温泉にて「月山山菜そば」)
※全区間徒歩:約4km 案内等協力団体:エコプロ

10/30
〈土〉



出羽の古道 六十里越街道会議 会長

小関 祐二氏

本日は、東北各地より、ここ山形、東北街道会議 第6回交流会 出羽の古道・六十里越街道大会においでいただき、大変ありがとうございました。

今まで、日本には西日本の文化だけが、世界で紹介されてきましたが、近年「もうひとつの日本」という言い方で東日本、取り分け、この「みちのく」に人々の目が注がれるようになりました。何故、時代は「みちのく」なのか、それはここ「みちのく」は、内なる幸福・心の財の宝庫であるからだと思います。

東北風景街道20ルートの11号が六十里越街道であります。六十里越街道は国道112号線がクロスした形で造られたため、致命的破壊から免れ、その後は国道利用と同時に使われなくなりましたが、地元の方々の手によって、昔のままの状態で残されました。日本風景街道・戦略会議の方々からは「日本一未整備な所だが、限りない魅力を持っている」との評価をいただき、まだまだ十分ではありませんが、行政区を越え、官民一体となって、山岳トイレの設置等、街道整備を推進してまいりました。

千二百年の歴史を持つ六十里越街道は、世界遺産となった熊野古道とともに「西の熊野・東の湯殿」又は「西の伊勢・東の湯殿」と言われ、江戸時代の東日本参詣の目的地でありました。最盛期には西川側から15万7千人の湯殿山参りがあったと記録が残っており、それは10年分の収益があったそうです。

湯殿山は江戸時代、俳聖、松尾芭蕉もその感動を「語られぬ 湯殿にぬらす 袂かな」と詠み、俳句の季語の恋心として使われ、知人・友人・親族を恋慕し、自身の人生を回想し、これからをどう生きるか、人生をリセットする参詣の道でありました。ここ湯殿山は、経済が混迷を極める現代社会の現代人に対して、希望と勇気を与えるに最も相応しい歴史背景があり、再び、その使命を果たす時であると確信いたします。このような事から今回「もうひとつの神秘日本、いま蘇る」というテーマを付けさせていただきました。

道は繋がってこそ道です。今回、この大会を期に「みちのく」の人々が集い・出会い東北風景街道20ルートが繋がって、この「みちのく」から世界に失望の穴から抜け出す「希望と勇気」を発信してまいりましょう。



▲オープニングセレモニーでは、皆さまを歓迎して岩沢三山神社太々神楽が披露されました。

基調講演

もうひとつの神秘日本、いま蘇る ～出羽三山信仰のひろがりと人々の心～

日本には、山を生命の源とする自然崇拜や、先祖の霊が山に宿り子孫を見守り続けるという、山に対する深い信仰心が脈々と息づいております。その中でも出羽三山は、関東から東北一円に及んで庶民の信仰の対象となった“東北を代表する山”であり文化遺産であります。その文化遺産を、未来学と言え“文化地理学”的にその価値を再認識し、どのように現代に生かし、どのように次の世代へと継承することが出来るかを講演いただきました。

1.日本の山岳信仰～自然と宗教との一体感

今日は、出羽三山参り、出羽三山の信仰について、また、それを目的として沢山の人々が歩いた六十里越街道について、話をしていきたいと思えます。

日本の山岳信仰というものは世界的に見ても非常に独特のものといえますが、自然と宗教が一体になったというところに大きな特徴があると思います。

◆山は水の源～水田稲作農業における豊作祈願 雨乞い信仰

山岳信仰には大きく分けてふたつの特徴があります。ひとつは日本を長く支えてきた稲作です。山というのは水の源であり、稲作というのは水がないと成り立たないので、山は豊作をもたらす神様であったわけです。そのため雨の降らないときには、山の神様に雨乞いの祈りを捧げるといった信仰がありました。我々の生命を支える、日本の米作りを支えてきたのが山から流れて来た水というわけであります。

◆祖霊の籠もる山～極楽往生祈願と祖霊信仰

ふたつめは、祖霊の籠もる山という信仰です。特に庄内地方でよく見られるものとして、モリの山という信仰があります。モリはいわゆる里山のことを表します。集落のすぐ背後にあるような里山に、人が亡くなると33回忌まではモリの山に靈魂が籠り、33回忌が終わると、その靈魂が奥山といわれる高い山に昇り、そこで祖霊となって子孫の成長を見守るといった信仰のことです。

2.出羽三山信仰～羽黒山・月山・湯殿山

◆東北から関東・北信越に広がる信仰

出羽三山信仰は、「羽黒山」「月山」「湯殿山」の山岳信仰のことですが、特徴としては信仰の広がりが広範囲に及んでいることがあります。東北からさらに関東地方、それから北信越、新潟、長野県まで信仰が大変広いエリアに渡っていたようです。

江戸時代の信仰の旅として、出羽三山参りのほかにお伊勢参りがあります。日本の中心部に向かって旅をしていく旅がお伊勢参りとすれば、出羽三山信仰は、“奥参り”という表現をされ「一番」「みちのくの」「奥」にある霊山というニュアンスが含まれていて、日本の最果てまで旅をするという意味合いが生まれていたのではないかと考えられています。

◆奥山(月山)と両脇の里山(羽黒山と葉山)寒河江市の慈恩寺

出羽三山における奥山と里山の関係として、真ん中の奥山に当たるのが一番高い月山であり、里山として羽黒山・湯殿山があります。ただし中世の段階では内陸側の葉山という山が、出羽三山のひとつであったというふうにいわれており、寒河江市にある慈恩寺という寺がその葉山修験と深くかかわっていたと考えられています。しかし、後に葉山

修験の山伏のグループが慈恩寺から出てしまうという形になります。その理由はよくわかっていませんが、そういった関係で江戸時代に入ると葉山が出羽三山から抜けるような形になり、代わりに湯殿山が中世の終わりぐらいから江戸時代にかけて三山のひとつになったようです。

◆修験の山(羽黒山)と庶民信仰の山(湯殿山)

出羽三山のなかで羽黒山は羽黒派修験のいわば拠点で、修行の山としての特徴を持っています。それに対し湯殿山は庶民の信仰の中心であったといえます。

出羽三山信仰は江戸時代に関東にも広く浸透していくわけですが、そうした奥参りの信仰の対象は湯殿山だったようです。それを示すものとして各所に石碑が残っていますが、これは山形県内に残っているものを見ると「湯殿山」とだけ刻まれている石碑が多いです。また関東へ行くと三山＝「羽黒山」「湯殿山」「月山」と刻まれた石碑が多く、その3つの真ん中に刻まれているのは「湯殿山」がほとんどです。

3.出羽三山をとりまく八方七口の登山口

◆庄内(羽黒・七五三掛・大綱)と内陸(本道寺・岩根沢・大井沢・肘折)

出羽三山の概要について補足をしますと、月山への登山口は八方七口と呼ばれており、江戸時代、七か所の登山口がそれぞれ平等な権利を持っていたようです。庄内側に三か所、鶴岡市の「羽黒山」「七五三掛」「大綱」、内陸側には四か所、西川町の「本道寺」「岩根沢」「大井沢」、大蔵村の「肘折」という登山口がありました。

◆湯殿山をめぐる天台宗と真言宗の対立(寛永寛文の両造法論)

江戸時代初めの頃、この7つの登山口が両造法論という湯殿山の祀りごとの権利を巡るような争いを繰り返していました。最終的には幕府の寺社奉行にまで訴えが上がり、月山と湯殿山の間に境界線が引かれる形になり、湯殿山は真言宗の山、月山と羽黒山は天台宗の山、という裁定が下ったとされています。

◆江戸時代の旅の記録(道中日記)～三山のすべてに参詣<上り口と下り口は別々>

かつてその境界のところは装束場と呼ばれていて、いくつもの山小屋があり、参詣者が衣装を変える場所でした。八方七口の登山口がそれぞれ共同管理をしていて、衣装を着替えるための小屋も持っていたわけです。道中日記(江戸時代の旅の記録)にも装束場に関する記述があります。また、道中日記には何十点も参詣のルートがあったことがわかる記述があります。基本的には「羽黒山」「月山」「湯殿山」の三山すべてにお参りをするという形になっていて、八方七口で登山口と下り口は別になる形でした。

◆明治維新時の神仏分離による解体～それ以前は神仏習合(山岳信仰の文化)

江戸時代は天台と真言の対立はありましたが、登山口は対等な関係になっていました。しかし、明治の神仏分離によって、羽黒山の麓の社務所が三山の祀りごとの権利を一括して統括する形に大きく変わりました。もともと山岳信仰の宗教文化は神仏習合のスタイルでした。例えば、岩根沢の旧日月寺は神仏習合の時代の建物なので、当時の出羽三山の宗教文化というものを理解する材料になります。文化を守っていくためには、そうした神仏習合との関わりの中で捉えていくべきところがあるはず、と思っています。

4.よみがえりの山～湯殿山

◆山岳信仰の擬死再生儀礼～峰の浄土と谷の地獄

山岳信仰、特に修験道の修行の場合、修行するということは「擬死再生」の儀礼であるということが強調されています。近年では、羽黒山の峰入りの修行に仏教側神道側にかかわらず、そういった意味合いで参加をする人々が大変増えているようです。



◆浄土と地獄の一体化が湯殿山信仰の特色

通常の山岳信仰は、山頂に祠が祀られていて、そこが信仰の対象になっている場合が多く、羽黒山・月山もそのケースに当てはまりますが、湯殿山の場合は山頂ではなく沢沿いにご神体があるという、一般的な日本の山岳信仰のなかでは異例のものといえます。日本では、そういった谷筋はむしろ地獄の世界であるという風に認識されてきました。一方で峰の方は浄土につながる極楽の世界という認識でした。

ただし私の解釈では、湯殿山には地獄と極楽の世界が一体になって蘇る「よみがえりの山」という独特の意味合いが確実にあったのではないだろうかと考えております。

5.三山を結ぶ道～参道(女人禁制)と街道(物資輸送 魚の道)

道としての六十里越街道には参道と街道に分かれて行くところがあります。峠越えの箇所志津と田麦俣という集落があり、ここで参道と街道に分かれていたようです。

参道は月山・湯殿山へ繋がる道であり、街道は峠越えで一番標高の低いところを越える物資輸送の道として、そしてもうひとつの意味合いとしては女人禁制の道として街道が存在していました。なぜなら出羽三山の場合、羽黒山は女性も参詣できましたが、月山と湯殿山は女人禁制だったからです。そのため三山参りに女性が来た場合、街道には抜け道的な役割があったようです。

◆地域をつなぐ街道の役割～徒歩交通時代の峠下集落(志津と田麦俣)

山形の武将最上義光は、最上67万石の基礎をつくるために、庄内と内陸を結ぶ道として六十里越街道を整備し、志津と田麦俣という一番奥まった宿場として集落を開いたといわれています。やはり街道交通・峠越えの安全を確保するためには峠の麓に宿場が必要だったということだと思います。

その後、時代の変遷とともに、第二次大戦後の開拓集落・高度成長期での離農・スキー場などのリゾート開発と、街道を取り巻く環境が移り変わっていきます。また“みち”も旧国道112号、現在の国道112号、山形自動車道と、現代の技術革新により、道路・高規格道路へと、その姿かたちを変え、新しい役割を持つようになっています。

◆歩く旅と神仏の加護～安全と健康 街道歩きのリフレッシュ効果

現在、江戸時代の旧街道は車の道ではなくて我々が歩いてリフレッシュするような安全と健康を目的とした“みち”として再生しています。我々も歩く旅を行うことによって健康を取り戻すであるとか、神様仏様に守ってもらえるものと考えています。それは昔にも繋がるものがあるのではないかと考えています。

◆現代における地域からの情報発信～宿坊の壇那場廻り

今日、出羽三山信仰には少子高齢化の影響もあり、その信仰を繋ぎ留める、継承していくことが難しい状況にあります。信者ではない一般の観光客に、この出羽三山の素晴らしさをアピールしていかなければならない時代になっています。

かつて山伏たちは、夏以外の季節に壇那場廻りという、信者の地域へ訪問し加持祈祷や占い、おはらいなどをし、信仰を繋ぎ広げて行くということを行ってきました。

◆映像を通じた情報提供

ではこれからどういう情報発信をすればいいのかということですが、映像や写真などをインターネットで日本全国、あるいは世界各地に色々な形で情報発信をしていくことはもちろん、効果的なコマーシャルの投下、映画ロケ地の誘致など、様々な試みをしていくことが必要とされています。

効果的な情報発信自体は難しいことですが、そういった試みが交流人口を増やしていくことに結びつき、地域の伝統文化を守っていく機運が、地元でも高まることに繋がるものと考えています。



岩鼻 通明氏
山形大学農学部教授



第1 分科会

地域における街道文化ネットワークの可能性

地域活力を再生するために、交流人口の拡大が必要不可欠であり、観光を基軸とする地域振興は益々その重要性が高まっています。そして、六十里越街道沿線自治体も観光圏による連携を深めながら地域の再生に取り組んでおります。かつて出羽三山信仰によって多くの旅人が時速4kmで歩きその風景の違いを感じ楽しみながら往来した六十里越街道を現代に生かすという視点から、出羽三山文化の現代的な可能性をネットワークを基軸に街道の重要性を紹介しながら、街道の価値を語り合っていました。

張 大石 氏(東北芸術工科大学准教授)

街道は主要な町と町を結ぶルートとして、距離と起点が定められた道のことで、主幹道と枝道を含んだ、言わば動脈と毛細血管を合わせたひとつのネットワークを意味しています。そもそも「街」という字は、四方につながる道を指し、「道」は儀礼によって清められた空間を意味していたそうです。つまり、街道は文化的空間のネットワークとしての姿があるわけです。この街道を現代的に活かすには人と、地域と、文化が重要なキーワードとなります。これらをどう繋いでいくのか、すなわち地域文化をどう創りあげるのか。ここに街道の現代的な可能性が関わっているわけで、この観点に基づくと、従来の「見る」観光から、「光」となるものを「創る」、すなわち「創光」の概念が重要となります。「創光」は時代的使命として、人口減少と超高齢化で悩む東北6県の共通課題にもなるものです。

こういった課題に対して、1982年に始まった「フランスで最も美しい村」運動はひとつの可能性を提示しています。これはひとことでは、世界に通用するような美しい村を創る運動です。ポイントは、地域文化を「自ら」保全し、修復し、プロモートする、この3点です。これによって、自分たちの村の付加価値を高め、ライフスタイルを確立し、更なる魅力を生み出すというわけです。この循環は、21世紀型地域創造に必要な要素となります。また、近年ユネスコでは競争型の世界遺産を見直し、「文化の道」というものを積極的に顕彰しようという動きが出ています。これは異なる国と地域にまたがるルートや関連遺産を、協働体制で活かすことによって、持続可能な社会形成と世界平和への貢献を図ろうとするものです。この概念を身近なものとして捉えた場合、六十里越街道に関わる3市2町が行政単位を越えて協働・連携体制を強める活動は、正しく先進的で、時代潮流に合致したものといえます。一行政単位で問題を抱えても仕様がいないこの時代に、「文化の道」で人と地域と文化をつなぐという諸活動は、新しい地域社会形成に大きな転換をもたらすに違いありません。

一方、東北は藤原実方、能因、西行、芭蕉へと、歌の精神史が連綿として流れている旅学の聖地でもあります。この上、江戸時代に盛んだった出羽三山文化が重なっているわけですから、共通した沢山の街道文化遺産をすずでもっています。この財産は大変大きいものですし、活かすべき共通の資源でもあります。これらを従来のように、地域ごとが断片的に取り組んだとしても大した効果は得られません。より広域的に、かつダイナミックな視点で捉えていくとすれば、人、地域、文化のつながりが強くなり、全体として活かされていく仕組みが生まれ、この過程で地域の豊かさも確かなものになっていくでしょう。実際に、出羽三山参りが盛んだった江戸時代の人々の足跡を見ますと、関東と東北全域がひとつに繋がり、大きな文化的なうねりを形成していました。それを支えるものとして、六十里越街道やそれにつながる諸街道、そして最上川舟運、北前

船があったわけです。そして、生活を営む人々が、それぞれの地域で、それぞれの役割をもって関わっていました。このように、「共に生かし、活かされ、生きていく」という公共の在り方を再認識する上でも、さらに21世紀型の地域創造という時代的使命という面でも、街道に関わる諸活動は大変意義深いものがあり、その重要性は益々高まっています。以上の内容を踏まえながら、様々な立場で諸活動を行っているパネラーの皆さまのお話をうかがってまいりたいと思います。

那須 恒吉 氏(西川町歴史・文化調査員)

私は西川町の歴史研究家として、出羽三山参りの重要なポイントを3つ申し上げたいと思います。

ひとつ目は湯殿山信仰の状況についてですが、享保年間の地元の記録によると、宿場町の白岩には一夏で15万7千人の行者が来ていて、この儲けで10年は寝て暮らせると記されています。また、道智道に関して、「湯殿まで笠の波打つ大井沢」という歌が示すように、盛況ぶりは私たちの想像をはるかに越えていたようです。これだけの人々がはるばる遠くは関東からやって来る理由はどこにあったのか。というと、湯殿参りは疑死再生と祖霊信仰と深く関わっていた上、伊勢参りと関係があった。これがふたつ目のポイントです。伊勢神宮と湯殿山大権現は同一体だと信じられ、お伊勢様と湯殿山は同じなんだ、同じ御利益があるんだ、だからお参りに来て下さいと、先達は檀那衆に呼びかけていたのです。これによって、地元はもちろん、関東、北東北全域の人々が湯殿参りにやって来ました。青森県の八戸藩の場合には、伊勢の皇太神宮にお参りするよりも、湯殿山に参詣に来た数が多いという記録も残っております。3つ目のポイントは、一歩一歩足を運ぶことに意味がおかれたという点です。歩くことによって世俗の罪を減らすことができる、という考え方がありました。だから、遠くからの人々が困難な道を歩いて来られたと思います。ちなみに、本道寺は戊辰戦争の時に伽藍が焼かれてしまい、明治22年に地元の人々が中心になって再建に至りましたが、その際にこの巨大な絵馬が奉納されました。これは大勢の女性たちが中心となって湯殿参りに出かける女講中絵図ですが、時代が変わって、これまでの女人禁制が解かれて、男女平等に湯殿参りが出来る喜びの顔が見事に表現されております。このように湯殿参りは人々にとっては喜びの道だったことがこの絵馬から想像できます。また、多くの供養塔などは、生活に直結した願いと、死後の世界に対する思いが込められていました。

こういった出羽三山文化における重要な話はまだまだ多く眠っていますし、一般には広く知られておりません。今後、さらなる学術的研究の推進とともに、人々の知的充足感や感動をもたらすような工夫が必要です。案内人の活動や資質向上にかかわる研修体制も必要だと思えます。



▶ 第1分科会では、パネルディスカッション形式で、街道の価値について語り合っていました。

村上 賢一 氏(山形県観光交流局長)

旅行のニーズは非常に大きく変わってきており、団体から個人へといった大量消費からの脱却はもとより、歴史や自然などを愛でながら時速4キロで歩き、体験する「体験型観光」へとシフトしてきております。本県では、松尾芭蕉の歩いた道や、六十里越街道、越後米沢街道といった古からの街道、そして雑街道やそば街道など近年取り組まれている街道があります。また、東北では、円仁自覚大師ゆかりの平泉中尊寺、毛通寺、松島瑞巖寺、山寺立石寺の4つの寺を巡るルートとしての四寺街道といった取組みがあります。そういった街道(ルート)を観光ルートとして、東北のみならず、全国、海外へと繋げていければと期待するところであります。

矢口 正武 氏(元気・まちネット代表理事)

現在は東京で仕事をしておりますが18歳までは山形県戸沢村にありまして、また、ここ弓張平公園は20年前に私が設計したという経緯があり、山形県とは非常にかかわりが深く、なおかつ感慨深いものがあります。

まだまだ歴史的な価値がたくさん埋まっている六十里越街道には非常に興味があり、藤沢周平さんの作品や小野寺良寛さんのガイドでの街道歩きや寒河江の宇井先生のお話など、六十里越街道にまつわる話やその時代背景などを知り、知れば知るほど興味が湧いてくる。そういった面白さというのは、まさにまだ発掘されていない街道ならではの面白さだと思います。

矢野 光夫 氏(「六十里越街道」を記録する会代表)

私の活動は、時代時代により、様々に形を変えながら、今に残る六十里越街道を次代に引き継ぐべく、ガイドやボランティア等を通じ、保存推進活動を行っています。

目的としては「地域創り」を目的としております。街道の文化的、歴史的なものを紐解き、その価値を高めることは、地域にとって、またそこに住むものにとって非常に意味があります。その点においても、行政と民間が協力して地域を創りあげていくこと、これが大切であり大きなことではないかと思っております。

張

文化の在り方も含めて、街道の在り方が今後どのようなようになるべきなのか。未来予想図を、次世代に向けてのメッセージとしてひとこといただきたいと思っております。

那須

ひとことで表すとなかなか難しいですが、「明日の生活を考えるのに、足しになる旅」ということだと思っております。

村上

住んでよし、訪れてよしの地域創りを行う上で、地域に暮らす人が、その地域の魅力を発掘し、磨き上げること。また、そのネットワークやリピーターを確保していくためには、これは「ホスピタリティー」つまり「おもてなしの心」を持つことが大事です。これは、西川町、鶴岡市含めて山形県全体の誇りだと思っております。これを忘れずに、30年後もあるべきだと思います。

矢口

「地域トラスト運動・エリアトラスト運動」があればいいのではないかと思います。まず街道の一般利用者から少しのお金をいただきます。そのいただいたお金を貯めて基金とし、街道を文化財として保存したり保護したりする活動や人々に活かしていく。私は、六十里越街道を通して、そういった活動をしながら、山形を次世代に繋げていきたいと思います。

矢野

「山形県の人は、先祖が守ってきたものを、自然に受け継ぐ風土がある」という研究成果があるそうです。私はこれを信じて、六十里越街道に関する活動を続けていきたいと思っております。

張

「学問としてのバックグラウンド」「行政の係り」「街道の持つ楽しさ」「現地で活躍される方の生の声」をいただきました。そういったお話が私たちの様に六十里越街道に魅せられたものや、街道を守る地元の方々への誇りにも繋がります。行政や民間の壁、また、地域の壁を越え、広域の壁を越え、国を越え、あらゆる境界を越え、時間さえも越え、人はもちろん様々なものが繋がるネットワーク、まさに街道となるでしょう。それが街道の持つひとつの使命であり、またその可能性だといえるのではないのでしょうか。

世界に通じる街創りを考えたときに、自らが奮い立って自らを高めるといった精神が必要です。その精神を着火剤として、次世代の人々に希望と夢をイメージさせることが、街道の持つ使命のひとつなのかもしれません。

これからも私たちは街道を歩き続けるでしょう。地域を越え、時を越え、普遍的な価値を見出すとき、街道は何度でも蘇り、未来創造への光が、私たちの身体に入り、理解する。それを感じながら、皆さん自身もそして周りの人も巻き込みながら、どんどん高めさせていただきたいと思っております。

課題もありますが、こういった活動は、どこにもないものだと思っております。普遍的な価値が生まれたときに、新たな時代の幕が開く。そんな来たるべき未来を想像したいと思っております。



張 大石 氏



那須 恒吉 氏



村上 賢一 氏



矢口 正武 氏



矢野 光夫 氏

第2 分科会

わが郷土の誇り 六十里越街道

街道を歩く人が増えています。六十里越街道をご案内されている方々を囲んで、なぜ彼らが街道を歩くのか語り合っていました。また、街道を歩く楽しみや苦勞を語り合っており、街道を歩く人のため地域として何が出来るのか。会場の皆さんも交えて、楽しくわいわい語り合いました。

鑑 啓記氏(NPO法人奥州街道会議理事長)

この車座座談会では、「わが郷土の誇り六十里越街道」ということで、六十里越街道の魅力や、歩く楽しさを語り合っていたきたいと思います。六十里越街道にかかわることとなったきっかけや、感じたことなどをお聞かせください。

齋藤 政広氏(自然写真家)

国土地理院の2万5千分の1の地形図を眺めていたところ、点線で六十里越街道が示されていたんです。歩いてみてすぐに素晴らしい道だということがわかりました。なぜかという、森の静けさとか、枯葉を踏む感触など今まで忘れていたというくらい新鮮に感じたんですね。これが六十里越街道との出会いでした。

また、私は写真を撮っているものですから、それぞれの季節や時間によって、出会いが異なるので、そういう意味では、楽しさは無限にあります。

小野寺 良寛氏(山船頭人協会会長)

当時の朝日村、現在の朝日地域をなんとかしようという話があり、何をすればいいのか考えていたところ、「まず、あるごでいあ」「まず、あるごよ」の言葉が出て来て、「アルカディア(理想郷)」と掛け合わせて「アルゴディア」となったわけです。まだ、この頃は六十里越街道をあまりクローズアップしていませんでしたが、歴史的な参詣道でもあることから、とにかくこの道を歩いてみよう、それがきっかけでした。

六十里越街道は文化の道です。ただ歩くだけだと単なる山道です。「語りながら」「喋りながら」「学びながら」歩けば、2人が3人になり、利用者も増え、百年の道作りになり、やがて千年続くような道へと繋がっていく。こうして少しずつ利用し活用していくことが、保存する活動へと繋がっていくと思っています。

渡部 千代氏(郷土料理家)

道者さんの姿は、普通と違う菅笠を被っていて、白装束で白い脚絆を巻いて、白い足袋に草鞋ばき。八角の金剛杖をつき、背中には横ゴザを背負っていました。特に印象的なのは、魔よけの鈴や鐘の音です。チリーン、チリーンと。その音が今でもずーっと、耳に染み透っています。道者さんが七五三掛から来ると、子ども達はずーっと道の両端に並んで「道者さん、道者さん、銭くーださい」と言って、お賽銭をもらったりするんです。道者さんは、私たち子ども達をお地藏さんとして見ていたんですね。六十里越の道者さんの姿は、今でも目に焼き付いています。

森先生(故・森 敦氏)との交流は、先生が注連寺に籠った時代の前からで、いとこ煮(あずき、もち米、かぼちゃを煮たもの)を好み、私たち凡人に素直に語りかけてくれる方でした。本当に惜しい方を亡くしました。

布施 範行氏(六十里越街道案内人クラブ)

私の家は本道寺の宿坊の末席に名を連ねており、それで湯殿山が非常に身近で、また、縁あって30代からは湯殿山のほうに勤めさせていただきました。

六十里越街道とその周辺地域は、私にとっての原風景というか、若いときからの心象風景の積み重ねでもあり、いわば「血」ですかね。「血」だと思って、私は、本日会場に来ております。

街道の中には地面が土ではなく、石畳になっている箇所がありますが、石畳は、現在の山靴で歩くのと草鞋や草履で歩くのでは感触が違います。草鞋や草履で歩けばスリッパしません。こういうわけで非常に良い石畳と私は言っております。昔の人と今の人の歩き方は違うので、実際に歩いてみると違いが分かります。

鑑

貴重なお話ありがとうございました。それでは、こうした街道での出会いや様々な体験談など、お聞かせ願います。

小野寺

何年前かの11月17日ですが、落ち葉トレッキングを6人で行いましたが、そのうち天気が悪くなってきて、最終的には雪中行軍となってしまったことがありました。清河八郎が江戸へ行くとき難儀して歩いたということ思い出しました。今年は清河八郎回天の道ということで、清河八郎が通った庄内町から鶴岡市に抜ける山道が整備されました。一里塚も再現され、案内する人も歩く人もずいぶん楽しんでます。

熊野古道には、世界遺産になる前と、なってからと2回行きました。六十里越街道との基本的な違いは、ドイツにもあります「黒い森」、つまり針葉樹であることです。

六十里越街道は広葉樹で、ブナの葉っぱの上を歩きますが、熊野は松の葉です。ブナと松、これが最大の違いではないでしょうか。

齋藤

ドイツのシュバルツバルトは大学の街でもあります。黒い森と訳されていますが実際はブナもあり、環境的には非常に美しいところですが、日本の森の多様性ははるく、生物も樹木の種類も多い日本の森は、世界的に見れば特殊とさえいえます。

長野に日本海側と糸魚川を結ぶ千国街道という塩の道があります。ここを歩く催しに何度か参加しましたが、田園地帯を抜け、白樺林に入ると、このあたりと似ている風景も出てきます。

布施

私は、黒沢峠にある非常に大きい石の石畳を歩かせていただきました。案内していた方が、自分たちの村には若い衆がいない、とおっしゃっていましたが、その点は私どもの地区でも危惧しています。

話は変わりますが、実際に歩く道もあると思いますが、心の道というものもあると思うんです。小さい頃、地元の古老から、月山の中腹の洞穴と東京の奥多摩町にある小内河内ダム付近にある鍾乳洞が繋がっているという話を聞いたんです。40年ほど前にそこに行きましたが、鍾乳洞がふたつあり、弘法大師の修行跡と伝えられており、そこには「出羽国月山と繋がっている」と書かれていました。また、奥多摩の地域史研究家に

鑑 啓記氏

左から
齋藤 政広氏
小野寺 良寛氏
渡部 千代氏
布施 範行氏





▲第2分科会では、会場の皆さんも交えて、わいわい語り合いました。

聞いたところ、400年ほど前、出羽の国湯殿山から、48本の梵天とともに獅子頭3体が奉納され、それが奥多摩町各地区に伝わっている獅子舞のルーツであるという話なんです。

大変興味深いことなので調べたところ、本道寺のとある坊が、300年くらい前に奥多摩地域に霞場を持っていたんです。先方では、伝えた側には残っていない伝承を、きちんと伝えてくださっていたんですね。本家のことばかりではなく、そういった分家の方々とのお付き合いも、これからは大事にしていかなきゃいけないんじゃないでしょうか。

会場からの発言

霞場を持っていた人って、冬の間奥多摩に行って、もしかして番楽を教えていたんじゃないですか。鳥海山のあたりでは番楽もありますし。

布施

そういう可能性もあるかなとは思いますが、私はもしかして、庄内や大井沢あたりから関ヶ原の合戦の戦勝祈願とかで行ったのではないか、あるいはあの辺は石灰の産地ですから、江戸城の壁を塗るため行ったのか、などと想像で思っていました。

会場からの発言

それは奥多摩のどの集落ですか。

布施

日原という所です。近くに倉沢という地区もあります。ふたつの鍾乳洞があります。山の裏は甲斐の国ですから、注連寺の檀家だったところもあったでしょうね。

鑑

ありがとうございます。車座座談会ということで、会場の皆さんの中からもお話をうかがいたいと思います。

会場からの発言 高島町の島津さん

私は二井宿峠古道ハイクという会に参加しています、この会が設立してから今年で12年目になります。山形県では、一番古い峠です。毎年5月の第2土曜日に開催し、自然と歴史を楽しみながら歩いています。峠には奥羽列藩同盟などの歴史もありますが、一番力を入れたのは「吉田松陰の道」です。また、江戸幕府への年貢米を初めて輸送した峠道でもありました。4キロの短い峠なので、樹木すべてに名前プレートを付けたり、自然博物館のようにしております。古道ハイクでは説明もいたしますが、歩く前に簡単な資料等を配布しています。西川町からも来ていただいておりますので、私がこちらに来たのは今回初めてですが、明日歩くのを楽しみにしています。

鑑

私も何度も参加させていただいている二井宿峠ハイクですが、毎年テーマが異なり、なかなか楽しい峠歩きです。小さな道ですが、毎回新しいことを教えてください。山形の十三峠について、敷き石の掘り起こしイベントなども行っている小国町の加藤さん、ひとことお願いします。

会場からの発言 小国町の加藤さん

十三峠交流会事務局にあります。十三峠のある越後米沢街道は、70数キロあり、山形の3つの町と新潟の関川村を入れた4自治体にあります。小国町には十三峠のうち、十の峠があります。この町は97%が山林ですが、そこに先ほど出ました黒沢峠があり、長方形の形のいい石が約3700段残されています。敷き石道を復元してから27回黒沢峠祭りを開催しました。

萱里峠では3年位前に、新たに石畳が見つかり、1人1,500円出させていただき、年2回掘り起こしをしていただいております。1回につき50人くらいお集まりいただいてまして、約900メートルくらい掘り起こしました。まっすぐな道ではないので、推測しながら掘っていきます。掘った方には記念の看板に名前を書いていただき、地元のお母さん達手作りの3色の雑穀おにぎりの昼食を出しています。評判もなかなかですよ。

こういった事業をこれからの産業に結び付けていければと考えております。ぜひ皆さんにも敷き石道を掘り起こしていただきたいと思っております。

鑑

私の知る限りでは、13もの峠を通して歩ける街道は全国でもここだけではないかと思っております。13の峠のうち、一か所だけ敷のところがありませんが、将来整備されるでしょう。

本日は六十里越街道を中心に、山形の峠歩きのお話を聞かせていただきました。

ありがとうございました。



会場では、パネル展を開催し、多くの大会参加者が熱心に見入っていました。



めでためめで♪花のやまがた観光図
「神秘日本 岡本太郎のアングルを歩く」モデルツアー パネル展



月山志津400年祭パネル展



東北風景街道登録団体活動紹介パネル展



月山志津温泉“変若水の湯 つたや”を会場にして街道談義を開催しました。山形の食材を中心とした料理と、山形の地酒を手に、街道談義に花を咲かせました。

街道探訪会A◆三即身仏・岩根沢コース(本明寺◆注連寺◆大日坊◆本道寺口の宮湯殿山神社◆岩根沢三山神社)



1.十王峠から月山を望む



2.本明寺即身仏成仏記念碑見学



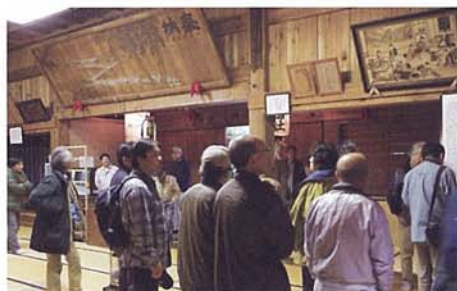
3.本道寺口の宮湯殿山神社仁王像と対面



4.大日坊住職と記念写真



5.大日坊にて護摩祈禱



6.本道寺口の宮湯殿山神社にて往時を偲ぶ



7.岩根沢三山神社にて宮司より由来の説明を聞く

街道探訪会B◆田麦保から湯殿山コース(田麦保七ツ滝公園駐車場◆独鉆清水◆千手ブナ◆)



1.独鉆茶屋跡で山船頭人協会会長の説明を聞く

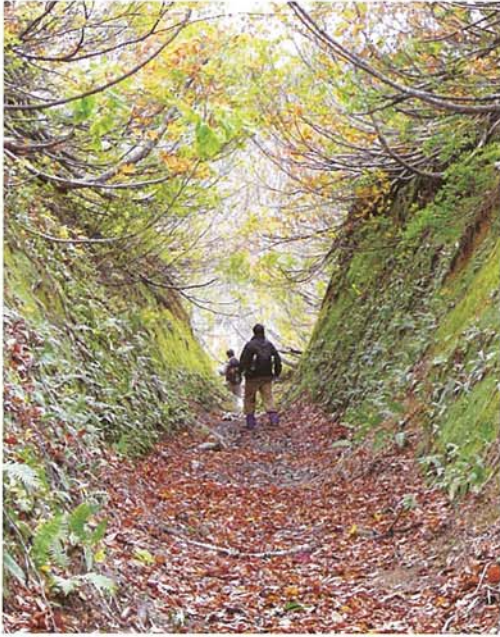


2.調査で引き起こされた「湯殿山道普請供養塔」



3.護摩壇石付近のなだらかな街道

街道探訪会B◆田麦保から湯殿山コース(▶細越峠▶笹小屋跡▶湯殿山ほてる▶七ツ滝公園駐車場)



4.大堀抜のぶなトンネル



5.大堀抜案内板と標柱



6.一里塚跡の説明に聞き入る



7.笹小屋跡で説明を聞く



8.一本橋跡付近の湯殿山碑に参拝

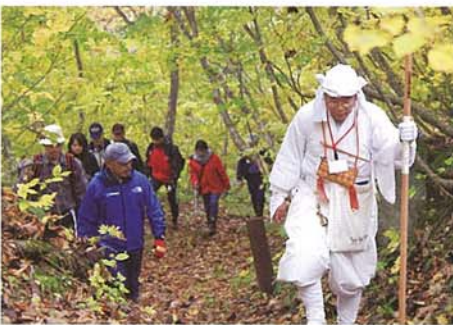
街道探訪会C◆四ッ谷山の神から志津コース(志津駐車場▶四ッ谷山の神▶弓張茶屋跡▶石畳▶常夜燈石碑群▶不動院跡)



1.四ッ谷にてお行様スタイルの矢野先生から説明を聞く



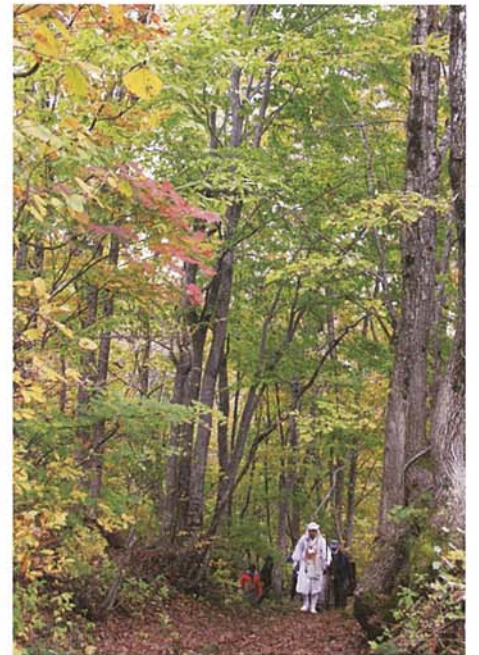
2.四ッ谷山の神の風景



3.弓張茶屋前の登り これを登ると一休み



4.弓張茶屋跡で当時を偲ぶ



5.落葉に覆われた石畳 見上げればブナの紅葉



6.常夜燈石碑群で説明を聞く



7.紅葉の志津・五色沼と不動院跡 安堵の表情と湯殿山遠望